BAB IV

KESIMPULAN

Setelah penulis menganalisis pemakaian *keishikimeishi* もの (*mono*) dalam bahasa Jepang berdasarkan struktur kalimat dan maknanya, penulis dapat mengambil kesimpulan yaitu :

1. もの (*mono*) merupakan salah satu jenis keishikimeishi yang tidak dapat berdiri sendiri dan hanya memiliki makna bila berada dalam satu kalimat atau diikuti kata lainnya, yang menyatakan sebuah alasan atau perasaan pembicara baik pada saat ini maupun dimasa lampau.
2. もの (*mono*) memiliki beberapa makna serta struktur kalimat yaitu :
   a. もの (*mono*) yang memiliki makna 本性規定(*honsyoukitei*) atau Penetapan asli, dapat menggunakan struktur bentuk negasi atau negatif (V- ない + もの), struktur kalimat bentuk kamus (V-る + もの), juga struktur kalimat bentuk lampau (V-た + もの).
   b. もの (*mono*) yang memiliki makna 説 明 (*setsumei*) atau penjelasan yang menggunakan struktur kalimat bentuk negasi atau bentuk negatif (V- ない + もの), struktur kalimat bentuk kamus (V-る + もの),

struktur kalimat bentuk lampau (V-た + もの),Struktur kalimat *adjektiva* (kata sifat + もの)

c. もの (*mono*) yang memiliki makna 一般的真理の叙述 (*ippantekishinri no jyojyutsu*) atau deskripsi kebenaran secara umum, yang menggunakan struktur kalimat bentuk kamus (V-る + もの). Struktur kalimat bentuk negasi atau negatif (V- ない +もの).

d. もの (*mono*) yang memiliki makna 詠嘆 (*eitan*) atau kekaguman, yang hanya menggunakan bentuk *adjektiva* A = *i Keiyoshi* + もの dalam struktur kalimatnya.

e. もの (*mono*) yang memiliki makna 驚き(*odoroki*) atau keterkejutan, yang memiliki struktur kalimat bentuk negasi atau negatif (V- ない + もの), dapat juga menggunakan struktur kalimat bentuk *adjektiva* A = *i keiyoshi* + もの .

f. もの (*mono*) yang memiliki makna 当為 (*toui*) atau yang seharusnya atau semestinya, yang menggunakan struktur kalimat bentuk kamus (V-る + もの), juga menggunakan struktur kalimat bentuk negasi atau negatif (V- ない + もの).

g. もの (*mono*) yang memiliki makna 事実として成立する事態の叙述 (*jijitsutoshite seiritsu suru jitai jyojyutsu*) atau sebuah deskripsi keadaan yang terjadi sebagai fakta, yang menggunakan struktur kalimat bentuk

kamus (V-る + もの), menggunakan bentuk negasi atau negatif (V- ない + もの), dapat juga menggunakan struktur kalimat bentuk *adjektiva* A = *i keiyoshi* + もの.

h. もの (*mono*) yang memiliki makna 希望 (*kibou*) yang berarti Harapan / Hasrat, yang hanya menggunakan struktur kalimat bentuk keinginan (V- たい + もの).

i. もの (*mono*) yang memiliki makna 回想 (*kaisou*) atau ingatan, dalam penggunaan struktur kalimatnya menggunakan bentuk lampau (V-た + もの).

日本語の文における「もの」の用法

統語論及び意味論における考察

インドリ

0342023

マラナタキリズト教大学

文学部

バンドン

２００９

日本語の文における形式名詞「もの」の分析

序論

「形式名詞」は名詞の一つで、名詞と同様の機能を持つが、独立する場合において完全な意味を持たず、ある文においてほかの単語と結合すれば、意味を持つとなる。それが、「形式名詞」と普通の名詞の違いである。

「もの」は「形式名詞」の一つで、町田（　）によると、「もの」は以下の類に区別である：

1．ある物と意味するを「もの」（物）（　この「もの」は名詞の種類に含まれる。）

2．「ものだ」つまり、述語として使われる「もの」（形式名詞の種類に含まれる「もの」）。

「ものだ」は独立する場合、完全な意味を持たず、ある文においてのみ意味をもつ。「もの」は各分において様々な構造及び意味を持つ。本論文は、形式名詞「もの」にはいかはるいみがあるか分析するものである。

本論

1. 辞書形（動詞）＋もの

例：お金はすぐなくなるものです。

上記の文においての「もの」は実際に発生すること事実に基づいて「なくなる」という動詞を言明する。

2. 形容詞＋もの

例：ジェット機というの速いものです。

上記の文においての「もの」は事実としてある事態の叙述に基づいて「速い」という形容詞を言明する。

3. ～タ形動詞＋もの

例：小学生の頃、妹よく喧嘩したものです。

上記の文においての「もの」は過去についての記憶に基づいて「喧嘩した」という動詞を言明する。

4. ～タイ形動詞＋もの

例：一度北海度に行きたいものです。

上記の文においての「もの」は願望、意思及び希望に基づいて「行きたい」という動詞を言明する。

5. ～ナイ形動詞＋もの

例：人間は一人では生きれないものだ。

上記の文おいての「もの」は本性規定に基づいて「生きれない」という動詞の否定形を言明する。

結論

「もの」は独立することができない形式名詞の 1 種で、ある文においてあるいはほかの単語に付いた場合しか意味をもたない。「もの」は現在及び過去において話しての理由及び持ちを表すものである。

「もの」は幾つかの意味及び文構造を持つ、それは：

a. 「本性規定」という意味を持ち、否定形（～ナイ形）、辞書形及び過去形（～タ形）の動詞とともに使う文の構造。

b. 「せつめい」という意味を持ち、否定形（～ナイ形）辞書形及び過去形（～タ形）の動詞あるいは形容詞とともに使う文の構造。

c. 「一般的真理の叙述」という意味を持ち、辞書形及びナイ形の動詞とともに使う文の構造。

d. 「詠嘆」という意味を持ち、ただ形容詞とともに使う文の構造。

e. 「驚き」という意味を持ち、否定形（～ナイ形）の動詞あるいは形容詞とともに使う文の構造。

f. 「当為」という意味を持ち、辞書形及び否定形（～ナイ形）の動詞とともに使う文の構造。

g. 「事実として成立する事態の叙述」という意味を持ち、辞書形及び否定形（～ナイ形）の動詞あるいは形容詞とともに使う文の構造。

h. 「希望」という意味を持ち、ただ形容詞とともに使う文の構造。

i. 「回想」という意味を持ち、過去形（～タ形）の動詞とともに使う文の構造。